6-8 唯物史観についての質問に答えて　　上記「6-7」と対でみること。

唯物史観の考え方(要約：青山)

①土台(経済的諸関係＝「一定の社会の人々が彼らの生活資料を生産し、また(分業があるかぎりは)生産物を相互に交換する、その仕方」)に立脚して上部構造はあるが、それらは相互に作用しあって、そのなかで、経済的必然性は究極的に常に貫徹される。

②人間の歴史は(歴史の進み方は)偶然性を通じて貫かれる必然性が支配し、その必然性はけっきょく経済的必然性によって生まれる。

⑤-[154]全部P361～367（ボルギウスあてのエンゲルスの手紙1894.1.25)

「あなたの質問にお答えします。

1.　われわれが社会の歴史の規定的土台とみなす経済的諸関係とは、一定の社会の人々が彼らの生活資料を生産し、また(分業があるかぎりは)生産物を相互に交換する、その仕方をいうのです。したがって、生産と運輸との全技術がこのなかに含まれています。この技術は、われわれの見解では、生産物の交換の仕方、さらには分配の仕方をも規定し、したがって氏族社会の解体ののちには、諸階級の区分、したがって支配・隷属関係、したがって国家、政治、法律、等々をも規定します。さらに、経済的諸関係のうちには、経済的諸関係がその上で生じるところの**地理的基礎**、また、以前の経済的発展諸段階から事実上伝えられた残存物――これが存続したのは、しばしばたんに伝統によって、あるいは惰性によってだけなのですが――が含まれており、またこの社会形態を外からとりまく環境ももちろん含まれています。

あなたが言われるように、技術のほとんどすべてが科学の状態に依存してはいますが、科学は、それ以上にはるかに多く、技術の**状態**と**要求**とに依存しています。社会がある技術的要求をもつならば、それは10の大学にもまさって科学の助けになります。流体静力学(トリチェリその他)の全体が、16世紀および17世紀のイタリアにおける山地の流水の調節の要求によって呼びおこされたものでした。電気についてわれわれがなんらかの合理的なことを知るようになるのは、その技術的な応用可能性が発見されてから以降のことです。しかし、残念ながらドイツでは、諸科学の歴史を、あたかもそれらが天から降ってきたかのように書くことが習慣になってしまっています。

※以下「6-6」と重複

2.　われわれは経済的諸条件を、究極において歴史的発展を制約するものとみています。しかし人種は、それ自体一つの経済的要因です。だが、いまここで、二つの点が見落とされてはなりません。

a)政治的、法律的、哲学的、宗教的、文学的、芸術的、等々の発展は、経済的発展に立脚しています。しかしまた、それらはすべて反作用しあい、また経済的土台に反作用します。経済的状態だけが**原因**で、**これだけが能動的**であって、他のものはすべてその受動的な結果にすぎない、というのではありません。そうではなくて、**究極的には**つねに貫徹する経済的必然性という基礎の上で行なわれる相互作用なのです。……ですから、人々がときどき安易に考えようとするように経済的状態の自動的作用が行なわれるのではなくて、人間が彼らの歴史をみずから作るのですが、それは彼らを制約する所与の環境のなかで、

既存の事実的諸関係の基礎のうえでなされるのであって、この諸関係のうちで経済的諸関係が、その他の政治的諸関係およびイデオロギー的諸関係によって影響されうるとはいえ、究極においては決定的な諸関係であり、ただひとつ理解に導く一貫した赤い糸なのです。

b)　人間は彼らの歴史をみずから作るのですが、しかしこれまでは、一つの総合計画に従って総意志をもってつくるのではなく、はっきりと区画された所与の一社会のなかでつくるのでさえありません。人間のもろもろの努力はたがいに交差しており、そして、すべてこのような社会では、まさにそれゆえに**必然性**が支配するのであり、この必然性の補完と現象形態が**偶然性**なのです。ここでいっさいの偶然性を通じてつらぬく必然性は、これまたけっきょくは経済的必然性です。(※ここまで「6-6」と重複)そこでつぎに、いわゆる偉人が問題になってきます。ある偉人が、しかもほかならぬこの偉人が、この特定の時代に、この与えられた国で出現するということ、これはもちろん、まったくの偶然です。しかし、われわれが彼を抹殺しても、そのには代わりの人への需要があって、この代わりとなる人がどうにかこうにか見いだされますが、長いあいだにはけっきょく、そういう人が見いだされるのです。ナポレオンが、ほかならぬこのコルシカ人が、自己の戦争によって疲れきっていたフランス共和国が必要とした軍人独裁者であったということ、これは偶然でした。しかし、ナポレオンという人物がいなかったならば他のだれかがその地位を埋めたであろうということ、このことは、人物が必要だったときにはそのつど見いだされたということによって証明されています。すなわち、カエサル、アウグストゥス、クロムウェル、等々。マルクスが唯物史観を発見したのにたいして、ティエリ、ミニエ、ギゾー、1850年までのすべてのイギリスの歴史家は、この史観にむけて努力がなされていたことを証明しています。そして、モーガンによる同じ史観の発見は、そのための時期が熟していたこと、そしてそれがまさに発見され**なければならなかった**ことを証明しています。

歴史における他のすべての偶然事や外見上の偶然事についても同じことです。われわれがちょうど研究している領域が、経済的なものから遠ざかって純粋に抽象的なイデオロギー的なものに近づけば近づくほど、ますますわれわれは、それがその発展のなかでもろもろの偶然事を示すことを見いだすでしょうし、その曲線はますますジグザグ状になります。しかし、この曲線の平均軸線を描いてみるならば、そこでは、考察される期間が長ければ長いほど、そしてこのように取り扱われる領域が大きければ大きいほど、この軸線が経済的発展の軸線にますます近似的に平行して進むことが見いだされるでしょう。

……

なお、マルクスが『ブリュメール18日』で与えた見事な例は、まさにそれが一つの実例であるがゆえに、それだけでもあなたの質問についてかなりの教示をあたえているように思われるのですが。また私も、『反デューリング論』の第1篇第9－11章、第2篇第2－4章、第3篇第1章または序説で、さらに『フォイエルバッハ論』の最後の節で、たいていの点にはすでにふれておいたつもりです。

以上述べたことでは、ことばのせんぎはあまりしないで、関連に注目してくださるようにお願いします。残念ながら、あなたのために十分に精確に書いている時間がありません。世間にむかってならばそうしなければならないところでしょうが。」＊……は青山の省略